

昔むかし、あるところに、娘と若者がいて、結婚の約束をしました。ふたりは、死んだ後もおたがいに忠実でいようと誓いあいました。

しばらくして、若者は、仕事で長い旅に出ることになりました。旅先で、若者は死んでお墓にうめられました。娘はそのことを知りませんでした。

娘は、あるお百姓の家で住みこみで働いていました。

ある晩、お百姓の家の戸をたたく者がありました。おかみさんが、
「どなた」とたずねると、声が、

「ここで働いている娘さんを、ご両親に代わってむかえに来ました」といいました。娘は、それが婚約者の声だと分かったので、

「あら、お母さんが、あの人をむかえによこしたんだわ」といいました。

「明日は、ぼくたちの婚約式なんです」と、若者はいいました。

戸を開けると、いとしい若者が娘の家の白い馬にまたがって、待っていました。娘は、若者の後ろに乗り、ふたりは出かけました。馬を走らせながら、若者は娘に語りかけました。

「月が君を照らしているね。死人の道づれで恐くないかい」

「いいえ、あなたといっしょなら、こわくないわ」

しばらくすると、若者がいいました。

「頭がひどく痛むんだ」

「まあ。ハンカチを額にまくといいわ」

娘は、白いハンカチを出して、若者の額にまきました。

やがて、ふたりは娘の家に着きました。娘は馬から下りて、戸をたたきました。

「どなた」

「わたしよ。むかえによこしたでしょ」

「だれを」

「わたしの夫になる人よ。馬の後ろにのってきたのよ。あの人、今、馬を馬小屋につながっているわ」

娘と両親が馬小屋に行ってみると、若者の姿はありませんでした。ただ、馬がびっしり汗をかいていました。若者が消えていたのを見て、娘は、若者が死んだことをさとりしました。

それからじきに、娘も死んでしまいました。

ふたりをいっしょにお墓に入れるために、若者のお墓を掘り起こしてみると、若者の額には、白いハンカチがまいてありました。